学校法人
鎌倉女子大学

懐(なつ)かしいシルス・マリア

―『ツァラトゥストラ』が生まれた村

「懐かしい」といっても、これまで一度も行ったことはありませんでした。場所の名前は、シルス・マリア、イタリア国境に近い東スイスのエンガディン峡谷にあるシルス湖とシルヴァプラーナ湖の間の小村です。

昔、まだ若かった頃、家族と一緒にここを訪ねようとしていたことがありましたが、故あって叶わなくなり、忘れがたい思い出のままになってしまっておりました。

狂気の天才思想家といわれたフリードリヒ・ニーチェが『ツァラトゥストラはこう言った』の相当部分を書いたのは、この山村でのことでした。

グリンデルワルトやマッターホルンといった多くの世界的な景勝地を有するスイス人の多くが、この場所こそをスイスで最も抜きん出た風景と絶賛します。

特にその内容をテーマにした標題音楽というわけではありませんが、「フリードリヒ・ニーチェに従って自由に書いた音の詩」と書き添えられたリヒャルト・シュトラウスの同名の交響詩によって、その評判は、いやが上にも高められ、かん高いトランペットのファンファーレと地の底から突き上げてくるようなティンパニーの轟きが交錯しながら奏(かな)でられる音楽の方は、かつてハリウッド映画「２００１年　宇宙の旅」に使われて、すっかりポピュラーになりました。

本書の第三部以降に、ニーチェが最後に辿(たど)り着いた境地、「永遠回帰」といわれる思想が語られるわけです。彼は、１８８１年７月４日から１０月１日までここに滞在し、「自分の生涯を自分自身に語り聞かせよう」としたためた草稿『この人を見よ』の中で、こう書いています。それは、８月のことでした。「あの日、私は、シルヴァプラーナ湖畔の森の中を散策していた。ズルレイ村近くのピラミッド型にそびえ立った巨大な岩塊(がんかい)のかたわらに立ち止まった。その時、私の身に永遠回帰の思想が到来したのであった」。

では、この黙示録的な雰囲気を漂(ただよ)わせる永遠回帰の思想とは、どのようなものなのでしょうか。その学問的な解釈は、もう亡くなられてしまわれましたが、随分優しくして頂いた吉沢伝三郎先生を初め、名だたるニーチェ研究家の解説に委(ゆだ)ねるとして、でもこんなことはいえるのかと思います。

人生には喜びもあれば苦しみも多い、幸せも訪れれば悲しみもめぐってくる。無論、人は、喜びや幸せの時間が永遠に続いてほしい、苦しみや悲しみの時間からは永遠に免(まぬが)れたいと冀(こいねが)う。でも、元より有限な私たち人間には、好ましい時間だけを永遠に自分の下に止

めおき、忌(い)むべき時間を永遠に遠ざけることは出来はしない。もしも時間を区切って考えるならば、自分たちにとって好ましい時間だけが持続するとも、辛く苦しい時間だけが推移するともいえるかも知れない。しかし、無限大から眺めてみれば、喜びの時も悲しみの時も、そこには同量に内包され、永遠に回帰してくるはずのものであろう。もしそうだとすれば、私たちが楽(らく)だけを無理やり永遠化しようとしても、楽は、やがて苦にかき消されていくことだろうし、むしろ悲喜苦楽が永遠に回帰する世界であればこそ、今の悲しみにもまた必ずやいつかは癒(いや)しが約束され、いっそう深い喜びを呼び起こす兆(きざ)しとなり得るのかも知れない。私たちは、苦楽のどちらか一方だけに目を奪(うば)われるのではなく、その双方が織り成す世界と人生を私たちに贈られた豊かな恵み、ゆめ疎(おろそ)かにすることの出来ない尊い出来事と受け取る時にこそ、消滅変化に惑(まど)わされない堅固な世界理解・人生理解が与えられるのではないのか。

この夏の終わり、森を抜けて、かつてニーチェが歩いたであろう道を初めて歩き、湖のほとりの起立した岩塊のかたわらで振り返って見たであろう風景を初めて眺めることが出来ました。この開けたパノラマを領しているのは、天の啓示を思わせるような沈黙の轟き、私も、いつの頃からかこのような気持ちで生きることが出来ればと思うようになってきました。

＞前のページへ戻る